



出も増え、体力も付いていった。外出することでこれまで見えなかったことに遭遇し、ボランティアだけで初めて経験する宿泊にもチャレンジする事が出来た。最後まで諦めないことが、次に繋がる。生きている時にしか出来ないことはたくさんあるが、悔いのない人生を送れるまで楽しみたい。今以上に目的を持ち、自分の出来ることをやり遂げたい。

● 人工呼吸器使用者が世間に知って欲しいこと

呼吸が出来ないことを想像できるだろうか？「話す」ことはとてつもなく労力が要ることを知ってほしい。呼吸が出来ることは当たり前なのだろうが、私たちは話すだけで酸欠になることがある。しかし「話す」ことは生活の一部であり意思表示であるため、疲れていても話すことをやめたくはない。会話することで自分の呼吸訓練にもなる。辛くても相手と話すことで気分転換になり、頑張ることができる。

プロジェクト報告

受傷してから3年以上経ち、次に何をすべきなのかと考えた。今は両親が同居してくれているので安心して生活出来ているが、この先何年後かには自分で生活をしていかなければならない時が来る。自分で自立する生活は、すぐには出来ない。計画を立てても実行するまでの準備や経験を積まなければならない。人の力を使って生活するのは、自分の生活のためである。人に介助してもらおうと予想できないことも起こる。その時に対応できる事、出来ないこと様々である。場合には失敗もあるが、「自分で何処まで出来るのか試したい」と思い、宿泊にチャレンジした。失敗して当たり前なので出来なかった時に「何が原因だったのか？どうすれば良いのか？」と、新たに気がつくことがあり、勉強になった。「人に伝える難しさ」「家族との距離感」など、やってみないとわからないことを学んだ。とりあえずやってみる。今より一歩でも変わりたい。自立生活出来るまでのステップとして訓練は自身の課題であると思う。

〈自立への想い〉

今、両親と生活をしているため、家の中でも何処に物が置いてあるのかほとんど把握していない。衣類や看護で使う物など自分である程度知っておかなくては、ヘルパーに指示する時に親がいないと困ってしまう。自分が指示を出し、人を動かして生活することは簡単ではありません。少しでも両親の介護を減らしたいと思いながら、なかなか思うように進んでいない。親だから甘えられるのだろうが、やはり苦労は掛けたくないと思ってしまう。今まで苦労ばかり掛けて、何一つ親孝行をしてやれない事は辛い。障害者になって更に介護に追われ、家族たちの時間も取れない現状はやはり辛い。自分をもっと努力すべきですが、両親が介護から離れ、ヘルパーやボランティアを利用し生活出来るまでになれば、他に何もしてやれない自分が出来る精一杯の親孝行のような気がする。自分で責任を持って生活することに意味があると信じ、この先自分自身が変化するために壁を乗り越えたい。



宿泊先での出発準備



三宮駅の近く



通天閣のちかく



神戸花島にて



お土産屋さん

関わってみたプロジェクト①



藤田 巖一 (神戸学院大学 学生)

プロフィール

山口県生まれ。2006年に神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・社会リハビリテーション学科に入学。2007年6月に市民公開講座のボランティアをきっかけに、兵庫頸髄損傷者連絡会との関わりを深めていく。2007年12月に大分県別府温泉旅行の介助ボランティアで米田さんと知り合い、以来、外出・外泊の介助ボランティアを行ってきた。

障害者が自己選択、自己決定できる社会になるためにはどのような支援や環境が必要なのか、当事者とともに活動を行いながら、必要なニーズを直接肌で感じより良い社会づくりの一員となれるよう活動していきたい。



大分旅行、別府駅前



プロジェクト報告

2007年6月
兵庫頸髄損傷者連絡会が開催した市民公開講座に参加した。そこで初めて頸髄損傷者と出会った。

2007年10月
明石の海岸でのバーベキュー大会に参加し、大勢の頸髄損傷者と出会った。



その中に人工呼吸器の使用者がいて、外出できることを目の当たりにした。誰もが純粋にバーベキューを楽しんでいる情景を見て、誰でも「楽しむ」ことに変わりはないと思った。

2007年12月
バーベキュー大会で知り合った鳥屋さん(大阪頸損連)から、米田さんの介助を依頼されて一泊二日の大分県別府温泉旅行に参加した。米田さんは一人で旅行することは無理だが、周囲の協力さえあれば実現できることを実感した。

2008年5月
大阪で開催された全国頸損連大会に、いつも2人介助だが、私1人の介助で参加、宿泊した。

2008年7月
介助者の輪を広げようと友達を誘い、米田さんの鳥取旅行に参加した。

2008年9月
自立を目指す米田さんに、先輩の宮野さんが「二泊三日の旅をしようや」と提案をした。二泊三日とは、旅先で排泄をすることを意味する。排泄をどこでも誰にでも任せられることができれば、海外旅行も一人暮らしもできると宮野さんは言った。私はその宿泊チャレンジに介助者として参加した。

2008年10月
今回の目的は、米田さんが自ら準備することでもあった。しかし、いざという時のため、米田さんに内緒でボランティア学生を集めておいた。結局、ボランティアのスケジュール作成、介助訓練、リフターのレンタルまで、私がすることになった。準備は大変だったが、当日はボランティアの動きも良く、遊びながらも、外出に伴う問題や人工呼吸器使用者の介助に関する問題などが見えてきた。米田さんが一番の課題としていた排泄は思ったより簡単に克服できた。今回、多くのボランティアが関わってくれたことで、「米田さんには私が居ないとダメだ」と思い込んで、誇らしく思いながらも苦しくなっていた私自身の課題も見えてきた。

